

Title	ボンヘッファーとわれわれ
Author	佐藤, 全弘
Citation	人文研究. 17 卷 10 号, p.905-926.
Issue Date	1966
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

ボンヘッファーとわれわれ

佐藤全弘

1965年は20世紀の精神界に多大の寄与をした偉人が相ついで逝った年であった。西欧文明の荒廢、宗教なきヒューマンイズムの無意味をつとに洞察し、文化はキリスト教を根本として再建されねばならぬと論じた詩人T・S・エリオット。「我と汝」という人格相互の根源的關係を高唱し、現代文明の方向に痛烈な批判をあげせたユダヤの思想家マルチン・ブーバー。60年余をアフリカの密林にあって黒人の医療に献身し、世界の平和に、また倫理の再建に、たゆまぬ思索と警告をつづけてやまなかった哲学者・医者・音楽家アルバート・シュヴァイツァー。これらの人々の訃報に接してわれわれは、今さらに彼らの偉大さを偲び、彼らなきあと精神界は一そうの寂寥を加えたことを感ぜずにはいられない。

そして今年のはじめ、われわれは、20世紀の人間について他の何人も及ばぬ深い洞識を示し、現代人の、また現代の世界の構造を余すところなく、しかも慰藉にみちて明示してくれた、スイスの予言者マックス・ピカートが、昨年10月、77才で亡くなったことをきいた。さきの三人の人々の場合とはちがひ、新聞紙に半句も報じられることなく、人知れず遷されたこの最大の Seher に対し、深い感謝を捧げるとともに、彼ピカートなき後、世界は最大の支柱を失ったことを痛感せざるをえない。このアトム化し切った、即刻滅びるも十分それに値する頽廢の極分裂の極に達したと思われる世界が、いまなお亡滅を免れえ、その回心の機会を与えられているのは、みずから識らず人も知らずに世界の支柱となっている12人あるいは36人の人々がいるからである、とはピカートがくりかえし告げた慰藉警誡の言葉であるが、まことに彼こそはアトラスのごとく世界の重圧を一身に荷ない支えた精神的巨人であったとおもう。ピカートが現代人の本質を見抜き、その初期の著作 (Der letzte Mensch. 1921.) でそれを明らかにして以来、今次の大戦を経ても人類は根本から改めることをせず、暗きはいや増す一方であったが、世の光たる彼を失って、世はその闇を一そう濃くすることであろう。そして、それとともに、ピカートが、世界はこのアトム化が超明瞭であるがゆえに救われうる、といったその救済の日も、ますます近づくのであろう。われわれはその馳せ場を走り終え、今や平安の教会に入ったピカートに対し、われわれがここ地上においてアトム化の真直中であって戦うことを告げるものである。ピカートの靈、天にありて安かれ、万物更生の朝われわれは相見えて、その教示を謝するを待望するものである。

ピカートは、現代人の根本に巣喰う「神よりの逃走」(Die Flucht vor Gott.)の顕現を、文学、芸術、哲学、科学、政治、教育、娯楽等、人間の活動の一切にわたって見たが、そのアトム化の権化、現代人の精神構造の典型をヒットラーに擬したことは、いまでは知る人も少なくないであろう (Hitler in uns selbst. 1946. 邦訳「われわれ自身のうちなるヒットラー」みすず書房)。ヒットラーの正体(それはとりもなおさずわれわれ現代人の正体でもある)を、ピカートほど明らかにした人はなかったのである。

ふりかえってわが日本に目を向けてみれば、日本ではこのアトム化も西洋とは異った様相を呈すると考えられる。アトム化が神よりの逃走であるとすれば、その神を一度も受けたことのない日本人がアトム化していることは、不可解とも思われるからである。そこにアトム化とあわせていま二つ考慮すべき要素があることが知られる。すなわち、特殊日本的なるものの存在と、それが西洋のアトム化の半途においてそれと遭遇したこと、いいかえれば神道とエンカウンターとである。西洋近代文明のインパクトによる神道日本のアトム化といえよよいであろう。(アトム化、神道、エンカウンター、この三つのものこそ、現代日本の一切の問題を規定している三つの根本的要因、三つの公理であることを明示されたのは、元本学教授坂田徳男先生である。先生が「京都文学」(ナカニシヤ書店) 三号以降(現在10号)に寄せておられる『近代と現代』を、虚心にぜひ読んでいただきたいと思う。)

そこで日本には、世界の他のどこにも見られぬような奇異な、また憤ろしい、何とも言いようのない不快嫌悪をおぼえさせずにはいない現象が見られるのである。たとえば、個人としての自覚がない、群衆の一人としてしか生きていない、あるいは或る集団の一員としてしか自己を有しないと、日本人について従来からもやかましく言われてきたことであり、明治以来の先覚者でこの点に留意せぬ人はない(文学者を例にとれば、漱石の自己本位の個人主義、およびそれを徹底させたとみられる武者小路の初期の考えなどは、その典型である。)しかし、個が社会に埋没しているのなら、その社会は個を併呑して個に生の細則をまで規定し、個はその社会に生甲斐を求め社会は個にそれを与えているのか、具体的にいえば、われわれ各自が、家庭なり会社なり国家なりに信をおいて、家のため、会社のため、国のためということに生甲斐を見出しているのかといえよ、これはそうでない。社会はその成員の忠誠を得ていないのが日本の現実であって、集団が個をほぼ完全に規定して、殆んどそれに自由をゆるさぬところに成立した旧日本の道徳は敗壞の極にあるのである。

これをベルグソン流に言えば、閉じた社会の閉じた道徳が、その拘束力を失ったといえる。日本の社会がベルグソンのいう「開いた社会」でないことは、これ以上明白なことではないが、さりとて「閉じた社会」のもつ社会的結合を満足に保っているともいえない。日本は、「開いた社会」を生んだ宗教や道徳に、太古以来いくたびか接する機会をもちながらも、心底からそれを受け入れることをせず、閉じた殻にこもりうとしてきたにもかかわらず、西洋社会がそれによって開かれたところの宗教の真理を捨てたあげくに到達した、その世俗文明がもたらされるや、やむことなくこれを迎え入れ、その結果、西洋のアトム化の渦中にまきこまれ、閉じた社会の統一を失いながら、しかも開いた社会とはなりえないという現状に陥っているのである。ベルグソンは、社会を解体する力に対する自己保存的防禦作用からして生命が静的宗教をよび起してくるといったが、日本の社会が、この寸断された状態においても辛うじてなおその形態を保ちえているとすれば、それは一にかかってこの静的宗教（神道）の力によるのであって、西洋社会がキリスト教によって一旦その統一を保ちえ、共産主義社会が擬似宗教たる共産主義により統一を得ながら、ともにその統一を失ってアトム化の度を深めていっているのとは、同列に論じることにはできない。西洋社会のアトム化をもたらしたものがその神からの離反逃走であったとすれば、日本のアトム化をもたらしたものは神抜きに溶融混沌といってよいであろう。西洋はアトム化をも内発的になしとげたに対し、日本はそれをすら内から生み出す力はなく、ただ外発的に受け入れるばかりであった。西洋のアトム化が、それからの離背という形においてにせよ、つねに神を視野のうちにもつに対し、日本のアトム化は背くべきものすらもたぬままの、全くの無定形としかいいようがない。言葉をかえれば、西洋がアトム化の進行とともに陥った混沌の中へ、日本ははじめからはまりこんで出ることがない、ともいえるのである。(Japanization of the world. はこれを裏からいったものだと思われる。)アトム化した西洋は、時いたればまたその統一的中心へ復帰するの気運が見られるのに対し、アトム化した日本は、トインビーが *Great was the fall of it.* と聖句をひいて言った(「東から西へ」)砂上樓閣さながらに、帰着すべき底盤をもたぬのである。しかも、アトム化は1年1年その度を深めて行く。とすれば、われわれはそのことにどのような意味を見出すことができるであろうか。

およそ歴史上生起する一切の事柄は、故なくして生じることはなく、歴史はつねに神の裁きの廷であるとすれば、アトム化が汎世界的になったことにも、かくれた聖旨が働いていると見られるのである。キリスト教が西洋社会でだけ受けい

れられ、それ以外の世界は、宣教師の献身的努力にもかかわらず、また自らの内からも幾多の信仰の偉人が出たにもかかわらず、福音を拒みつつけてきたのである。しかし、「あらゆる国々の人に証しするために、この御国の福音が全世界に説かれ、それから最後が来るのである」(マタイ伝福音書24・14塚本訳)とすれば、そして教皇ヨハネス23世も言ったように、人類が今や自滅の瀬戸際にあること、しかもそれがアトム化の結果であることをみとめるならば、このアトム化の世界化こそ、逆説的ないい方ながら福音が万国に宣べ伝えられたことを意味しているとは考えられないであろうか。アトム化はまさに福音の逆逆であって、福音そのものを頑なにも拒みつつける世界に対し、神は非常の手段を用いて、倒逆形において福音を伝播させたもうたのではあるまいか。とすればわが日本がその宣伝に浴しえたのは恩恵といわねばならぬ。われわれはアトム化より起る苦悩を底の底までなめつくすことによって、それを洞徹して福音に至らざるをえしめられるのであると心得るべきである(これも坂田先生の示されたところである。「京都文学」第7号『近代と現代』V参照。)

アトム化を生み出した当の西洋では、さすがに転回の萌しが見えもする。兩次の大戦をへて、歴史家、神学者、思想家の中には、近代全体の歴史的意味について真摯な反省をうながし、背き来った者の裁きの意義に思いをひそめる人が少ない。(この文のはじめにあげた4人の人たちのほか、たとえばドーソン、ベルジャイエフ、ダーシー、ニーバー、マルセルなど。)万人が無宗教的となったこの世界において、教会はいま一度草創にかえり、一なる神一なるキリストの教会たるべく、二千年間の歩みを反省している。ボンヘッファーも参与していた世界教会運動は、いろいろの批判はあっても、その方向での自覚的試みであるといえるし、ヴァチカンもまた新旧両教の間の対立緩和ばかりでなく、東方正教とも和解を得る努力を惜しんでいないのも、それを示すといえる。(この意味で、わが内村鑑三の信仰と思想もアトム化透脱の大きな力となると信じる。)

いまここにボンヘッファー(Dietrich Bonhoeffer 1906-45.)を論題とするのも、以上の見地からにはほかならない。彼は1945年に殉教をとげてアトム化という言葉もしらず、戦後のアトム化の深刻は肉の目に見てはいないが、アトム化の権化たるヒットラーとの対決にかけたその生涯、そしてその対決をとおして形成された思想やえられた洞見から、超ヒットラー的な現実に生きるわれわれは、必ずや多くの示唆を与えられることと思う。われわれはまずこのアトム化への洞察、すなわち現代人について彼の達しえた洞識についてのべ、ついで彼が獄中において悟得した思想、彼の中心的思想たる「成人せる世界」(die mündig gewordene Welt)について数言したいと思う。

(1) 現 代 人

現代人は持続した時間をもたぬ。タイム・テーブル式に一切を寸断して行うことは、なにもラジオ、テレビに限ったことではない。工場にしても学校にしても、連続した時間をどのように断つかに心をくわいているのであり、また断つことによってはじめて運営がなされているのである。持続を強調した哲学者といえればベルグソンであるが、ベルグソンがそのように持続を力説せねばならなかったこと自体が、持続がすでに喪われていたことを如実に語っているのである。「失われたものだけが街に喧伝されるのである。」(ジャン・パウル)

ボンヘッファーは現代人のこの特質を獄中での体験から知ることができた。1944年2月1日付のベートゲ (Eberhard Bethge) 宛の手紙に次のようにある。「僕自身の場合にも、またほかの人々の場合にも、いつでも不思議に思われるのは、爆撃の夜の間を受けた印象をすぐ忘れてしまうということである。空襲の数分後にはもう、それまで考えていたことは、ほとんどすっかり、まるで吹き消されたようになっている。ルーテルにあっては、一閃の雷撃が、永年にわたって、その生涯全体に転換をもたらすに足るものであった。今日、このような『記憶』はどこにあるであろうか。このような——おそろべき言葉であるが——『道徳的記憶』の喪失こそ、愛、結婚、友情、信実という一切の紐帯の崩壊の原因なのではないか。残るものは何一つとしてなく、定着するものも何一つとしてない。すべてが短期的であり、躁急である。ところが、正義、真理、美という賜物、あらゆる偉大な業は、総じて時と永続性と『記憶』とを必要とする、もし後者がなければ、前者は頽廢するのである。過去に対して責任を負うつもりもなく、未来を形成しようとする志ももっていない者は、「忘れやすい」(vergeßlich) のである。どういう場合にそういう人に感銘を与え、その人を正し、その迷夢をさますことができるのか、僕にはわからない。というのは、言葉はすべて、たとえ一瞬間は感銘を与えるとしても、忘れ去られてしまうからである。」(Widerstand und Ergebung. S. 143.)

記憶、持続、連続、連関、結合、中心、責任、感銘、注意、意識、印象、愛、真実、友情、美、正義。これら一切のものは、全き時間が存在する世界でのみ、意味と存在をもつのである。過去をひたすらに捨て去り忘れ去る人間は、未来に対しても何の希望ももたず、何の期待も寄せず、待望するところもなく、意図も懐かず、志ももたないのは当然であり、しかもすでに過去なく未来もないとき

は、現在（今）もその意味を失うのである。したがってそのような人間には、ただ動物的な瞬間だけが残されている。猿や兎がたえずキョロキョロし、せかせかし、瞬間から瞬間へと生きているのと同断であることになる。動物には内（das Innere）がない、内を省むということがない、注意は終始外方に向けられなければならない。そして内あつての外、外あつての内であるとすれば、じつは外的世界も外的対象もかれらには十分な意味で確と存在せぬのである。人間が内面を失うということがどのような意味をもつかがこのことから察しられるのである。

Nichts haftet, nichts sitzt fest. Alles ist kurzfristig, kurzatmig. 大都会の朝のターミナルにひしめく人々、高速道路を疾駆する自動車の群、これこそ時を失った人間の縮図である。性急、躁急そのものである。ますます速さを加える交通手段によって距離を征服しえた（annihilation of distance）と呼号する現代人、これこそ充実した意味での時間を失い去った人間、人間の人間たる特徴である持続、連続を喪失した人間にほかならない。

記銘能力、想起能力にはもとより個人差があり、どの時代にも優れた人と劣った人があったに相違ないとしても、現代人がボンヘッファーのいう道徳的記憶はもちろん、一般の事柄についてもじつに忘れっぽいにはおどろかされる。これはただある一つの能力において衰えを示したというだけに留らない。それは、現代人がもはや何ものにも驚かず感歎せず（プラトン、アリストテレス以来、驚くということが知ることの、したがってまた哲学のはじまりである。驚かぬ人は考えもせぬのである。Joseph Pieper, Was heißt philosophieren. 参照）、何ものからも印象をうけず、受けても即刻忘却し、どのような出来事、愛も誕生も死も、その砕けきった精神の表層を擦過し去るばかりであること、つまり印象を受けてそれを止めるべき人間の内面、中心、根本がもはや存しないことを語るものである。時を失った人間、神を離れた人間は忘れ易いのである。ホメロス語りの吟遊詩人やわが国の語部など記憶を業とする人は特別として、古くは一般の人もよく記憶した。例えばキリスト在世時のユダヤ人は、とくに学者教法師という人達でなくても、主な経典は諳んじていたということである。（E. J. Goodspeed, A Life of Jesus.）そんなに古くを探さなくても、明治に生い立った人々の話をきけば、その人々が若いときに得た印象が、50年、60年を経過してなおどんなに鮮明に脳裏に刻みつけられ、胸底に保持されてあるかに、おどろくのである。

なるほど昔は事が少く、平穏平静な日常であつて、何らとくに感興をそそるようなこともなかったから、そのような生活の中に現れた画期的な出来事について得た印象は、強烈に焼きつけられたのだという向もあろうが、では今は殺到する

印象が多すぎるから、相殺して何一つ残らぬだけだといえるのであろうか。たしかに刺激が反復されると、感覚は鈍磨し、習慣となるが、では一切がこの習慣という自動機構のうちにはめこまれているのであろうか。単なる習慣からは何の新しい創造も生れてこない。そこに習慣を突破って働く人間の内面がなければならぬ。そして印象を内に留め確保してそれに意味と連関を与え、それをして一つの出来事たらしめることは、創造の働きであるから、出来事も印象も人間の内面を離れてはありえないのである。出来事はそれに与えられる意味のゆえにはじめて出来事たりうるのである。このようにみれば、現代においては真に出来事といえるものはないのであって、かえって事少しと思われる往時に多くの出来事がみとめられるのである。真の体験となり、人間の形成に資せぬような、単なる惰性的な刺激の連続は、印象・出来事の名に値しないのである。内界あつての外界である。したがって内界が分裂していれば、外界も成り立ちようがない。人間は確たる自己の内面に過去を緊密に把持し、未来を眺望し、そしてこの充実せる時の中にあつて現在を生きることをやめて、瞬間から瞬間へととび移ってゆくのである。瞬間的なるものは、砕けたる人間の心をすら満足せしめるものではない。そのゆえに休らぎをえることなく、たえず次の瞬間へととんでいかねばならなくなるのである。das Augenblickliche の支配である。

記憶なき人間は schnell und schamlos になつたともボンヘッファーは言っているが、これは物言いにもまた挙措動作の節々にも現に実感されるところであり、伝統破壊、無責任、虚言もそれと因を一つにするもので、このことも、内面・時間・持続の喪失と直結することなのである。

ボンヘッファーは、また、これら時を失つた人々、記憶をなくした人々にとっては、どのような印象も何ら永続的なものでないから、およそ言葉でもってその回復をはかることはのぞみ難いとし、ほとんど施す術なしとも言っているが、まさしく、真の持続・連続・連関・時間の回復は、人間の側からみる限り、不可能とも思われるのである。

二

わが国でもここ数年来、国語問題はますます論じられてきており、戦後の拙速安易といわれる国語改革に対して批判の声が挙げられ、またそれに対する弁明が行われてもいるが、この問題は明治の始からくすぶりつづけていた問題で、明治41年文部省主催の臨時仮名遣調査委員会で、かなり思い切った改革案が出されたが、伝統的国語表記法を守れと委員の一人である森鷗外が力説したために、その

案が流れ、ついにこの度の敗戦後に至ったものであることは、周知のとおりである。表記法の是非はいまここでふれないとしても、言葉がますます貧しく悪くなったこと、またその用法が乱れに乱れてきたことは、学者の指摘をまつまでもない。われわれの話す言葉、われわれの書く文章がじつにその適例なのである。

日本語が元来きわめて貧弱な言葉であって、抽象的理論的表現には適せず、漢語の助けをかりてはじめてその用を幸うじて便じることができたこと、日本人に欠けているのは偉大と根本的獨創性とであり、偉大な思想を表す言葉が日本語にはじつに乏しいことを嘆いたのは、内村鑑三であったが（『代表的日本人』中の「国土と国民」参照）、漢字渡来以来千数百年、われわれの祖先が孜々として摂取につとめ、活用してきた漢文学の素養も、所詮は鍍金であり、一旦国民の精神構造に他の方面からより強い影響が加えられると、たちまちにして失われてしまうものであったことは、戦後の混乱の中に生きているわれわれには、改めて問う必要もないことである。美しいやまとことばがすてられて舌足らずの外来語がとって代ったり、和語の本来の用法が崩れてきたり、漢語が誤用されたり、敬語が乱れたり、これらは用語法の変遷もしくは混乱、誤用、濫用であり、いずれも言葉の崩壊の一部面を示すきわだった現象であるが、その最も深刻なるものは他にある。ボンヘッファーはそれを鋭く見据えている。

遺稿「倫理」(Ethik. 6te Auflage 1963.)の附録になっている「真実を語るとは何を意味するか」(Was heißt : die Wahrheit sagen?)という未完成の一文に、そのことが論じられている。「言葉はすべて、ある一定の境域において生き、またそこにその故郷をもっているのである。家庭における言葉は、事務所や公けの場所における言葉とは違ったものである。人と人との温かい交わりの中で生れた言葉は、公けの冷たい空気の中では凍え死ぬ。公けの職務からして発せられる命令の言葉は、家庭において語られれば、その信頼の絆を切り切ってしまうであろう。言葉はすべてそれぞれその場所をもつべきであり、またその場所を保持すべきである。さまざまに違った言葉のもっている特質とその限界とが、もはや明らかに感じられず、そればかりか、たとえば個性にみちた言葉がもっている特性がほとんど破壊されているのは、新聞やラジオで使われる公けの言葉が蔓延してきた結果である。本当の言葉が、下らないおしゃべりに取って代られている。言葉はもはや重味をもっていない。あまりにも口数が多すぎるのである。しかし、さまざまの違った言葉のもつ限界が消え失せるとき、すなわち言葉がその根を失いその故郷を失うとき、そのとき言葉は真理を失うのであり、まさにそのときにはほとんど必然的に、嘘が立ち現れるのである。」(S. 389. 邦訳は「抵抗

と信従」に収められている)

現代における言葉の破壊、言葉がもはや真理を盛る器たりえないことについて、ほとんど余すところのない洞識である。統一と連関が失われる分裂たるアトム化は、また、一切のものがその境界を撤して混入乱入しあう、普遍的混融溶融 (Allgemeine Auflösung ; Durcheinander) であり、'およそ限界、境域、領域、分限、ということがない。したがってまた秩序も、権威もない。言葉は精神の秩序の徴、真理の表現であることをやめて、アトム化、断片化、混乱の徴となる。もはや意味とのつながりを失い、単なる音声、記号、叫声、と化する。持続なく連関のないところに意味はありえないからである。そして言葉と行為・出来事とは断絶してしまうのである。行為はもはや言葉からの尺度と制限を受けつけない、途方もない、言葉で表し難いものとなるのである。(Max Picard, Atomisierung der Person. 参照)。ピカートはアトム化した言葉を騒音語としてとらえ、その種々相、その依って来る根因を剔抉したが (Wort und Wortgeräusch.), ボンヘッファーも現代における言葉の同じ様相を洞察していたのである。(Hans Rudolf Müller-Schwefe, Die Stunde des Gesprächs. も同じ現実認識をふまえて対話の喪失を論じている。)

人間がその中であってこそはじめて真に生きるといいうる世界の崩壊、家庭の解体、人と人とのまことの関係の断絶 (ブーバーの言葉をかりていえば、我と汝 (Ich und Du) という人格的根源的關係が崩れて、一切を非人格的なものとしてみる我と物 (Ich und Es) という關係に墮したこと)、したがってまた信頼の根絶、対話の消滅、それらはすべて、純正なまことの言葉が、ラジオ、テレビ、新聞などをを用いて流され、あらゆる境界を踏み破って混乱奔騰する騒音語、冗舌語になってしまったことと、その原因を一にするのである。言葉はその故郷を失い (heimatlos), その意味を繋ぎとめるべき根柢 根拠をなくし (wurzellos), その守るべき境界を喪っているのである (grenzenlos)。

これにたいしては、真理は普遍的であるから、それを表現すべき言葉にも、区々たる境界などあるべきでなく、公共普遍でなければならぬと、あるいは考えられるかもしれぬ。しかし、真に普遍的な真理は、個々具体を捨象して、ただ普遍の中に宿るのではない。そのような真理は抽象的な思惟の産物にすぎず、生きた力をもたぬいつわりである。真理は個の中に表現されてはじめて、生ける普遍的真理たりうるのである。「我は真理なり」と言われた方が、単なる無形な抽象的形而上的存在ではなく、また単に空想の産物でもなくして、歴史の一時期に、地中海東部の一寒村に呱呱の声をあげたまさしき一個の人間であったことが、一切の真理の原型なのであって、ボンヘッファーもこの真理に立てばこそ、真理を盛る

器たる言葉の境界、限界、故郷を語り、その言葉の重さを語っているのである。

世代が異れば言葉も異なるのが当然である。子供には子供の言葉があり、それは労働組合や議会などで怒号する言葉とは本質的にちがったものであるべきであるが、この相違も現代ではかなり混乱してきているのではないか。あどけなき童幼のまどかなる世界が、四周の混乱分裂の中にあって、いかに速かに破壊されてしまうことであろうか。とげとげしい分裂の断片が（そして断片語が）、子供の全き魂の中へ闖入し、いかにそれを傷めていることであろうか。子供が子供らしくなく、大人が大人らしくない世界、一切の境界が混入交錯して、すべてが明瞭な輪廓を失い、ただその喪失の現象だけが過度に明瞭なこの世界（いな非世界）では、内面的時間は失われており、それゆえ、発育、発達、生長ということも真の意味ではほとんど無きに等しいのである（Max Picard, Einbruch in die Kinderseele 参照）。

ボンヘッファーは相貌のことには言及していないが、境界限界の喪失は、ひとり言葉だけでなく相貌にもあらわれる。相貌はその人の形成するものであり、40をすぎれば自分の顔に責任をもてともいわれるように、内面の表現たる点において言葉と異るところはない。アトム化の世界にあっては、化学教授の顔も銀行頭取の顔も同じであるとはピカートの言うところであるが、内面形成の皆無は、ここにも明かに看取されるのである。相貌はいまや職業のみならず、年令、性別、はては人種によってさえも、はっきりと限界づけられることがない。幕末明治の人々の顔を今テレビに映し出される人々の顔と比べてみると、それは同一民族というより異民族の顔といった方がよいくらいである。混融の現象は疑うべくもないのである。（都市化の問題や、地方色・方言の消滅、大衆化などもこの見地から考えることができる。）

言葉の破壊、まことの言葉の喪失は、このようにして、その淵源するところはきわめて深く、また同じ淵源から生じる並行現象は、およそ人間の表現の一切にわたっている。（精神分裂病にあっては、自我意識の障害として、自己と他との限界意識や、時間的な自己同一意識、統一意識などの障害がみられるとのことであるが、ボンヘッファーもいうように、現代人は自己の内的統一、内的持続を失い、言葉も限界を失っているとすれば、このことは、現代という時代が分裂病的であることをその特質とすること（ピカート）を意味するものに外ならない。）

三

瞬間性をその根本的特質とする現代人、内的連関を失った現代人にとって、学

問教養ほど身につけ難くまた維持しにくいものはない。ボンヘッファーは、その獄中書簡を一読してもはっきりわかるように、真の教養を身につけた人であった。その学識の深さ広さ、豊かな情操、逞しき知性の活動は、現代において稀なるものであった。その彼ほどの人でも、その師ハルナックの「大学の歴史」(Geschichte der Akademie)の中に描かれている大学者の人間像と自分を比べてみて、学問教養の喪失に悲痛なおもいを禁じえなかったのである。

その獄中書簡1944年2月23日でボンヘッファーは次のように言う。「今日どこに精神的な『ライフワーク』がなお存在しているであろうか。それが成り立つための集積・理解・展開はどこにあるであろうか。そのような生活になくはならぬ高潔な無目的性 (die schöne Zwecklosigkeit) と、にもかかわらず偉大な計画 (die große Planung) とは、どこになお見られるのでであろうか。今なお自由に仕事のできる唯一の人達である技術者や自然科学者の場合でも、そういうものはもはや存在しないと思う。『普遍的教養を身につけた人』(der „Universalgelehrte“)は18世紀が終るとともに跡を絶ち、19世紀には包括的教養 (die extensive Bildung) に代わって集中的教養 (die intensive) が登場し、そしてついにはその集中的教養から、前世紀の終り頃になって『専門家』が出てきたとすれば、今日では各人は厳密にいうとまさに『技術屋』 („Techniker“)に外ならない——芸術においてすらそうである(音楽においてはよりっぱな体裁の、絵画や詩においては最も程よき構成の技術屋にすぎぬ!)その場合われわれの精神的実存はトルソーたるに留るのである。」(Widerstand und Ergebung. S. 153. 1944年2月20日付両親あての手紙にも同じ考えがのべられている。S. 80.)

すぐ役立つこと、目先の用に立つことだけをめざしての技術屋根性に支配されている現代人にとって、schöne Zwecklosigkeit とか große Planung とかほど欠けているものはない。科学は今でこそ人類の安楽な生活に奉仕するものと考えられているけれども、その根源は、修道院的禁欲、安楽享受を犠牲にした献身的な研究、時には生命をすら賭しての真理の探究に求むべきであるとは、ベルグソンがその歴史観の例証にのべているところであるが(「道徳と宗教との二源泉」最終的注意)、自己の研究の達成をさえも目的とせず、ひたすら物事の理に即して考えて行くところにこそ近代科学は生れえたのであった。

しかし今や事態はまったく一変している。ボンヘッファーは、まだ科学者技術家だけは自由に仕事ができるように思っていたが、事實は当時すでに自由な科学的研究はなかったといってよいのである。ヒットラーの下ではもとよりのこと、

彼に敵対した国々にあっても、それは許されなかったのであり、またヒットラーをまつまでもなく、技術化した科学には、自由の余地はほとんど見出されないのである。原子爆弾、水素爆弾出現以後の今日では、そのことは一そう明らかである。今日政府官公庁、もしくは公私の企業体と何の関係ももたずに研究をつづける重要な分野が科学にあるであろうか。アメリカの大学や研究所の研究で何らかの経路で軍からその資金を得ていないものは極めて少いといわれるが、何もアメリカに限ったことではない。共産圏では研究の自由に対し一層直接に強制と制肘が加えられていることは、最近の中共の動きをみてもわかることである。他国はさておき、明治時代に大学が設立されたのは、そもそも何のためであったのか。真理の探究のためというより、国家有為の人材をつくるということが大目標であったのではなかったか。そしてその結果が、真の教養をついに培いえないまま今日に至ったのではないか。日本が西洋と相触れたのが、あたかも西洋が世俗化のテンポを早め、学問教養が、科学の分化の影響もうけて、失われようとしていた時期であったことも、不運とはいえるかもしれぬが、責は他にのみあるのではない。

ボンヘッファーは、オルテガが *Barbarism of specialization* とよんだ (*The Revolt of the Masses. chXII*) 現象を、さきに引いた文で簡潔にのべている。18世紀の *der Universalgelehrte* とは、まずカントやゲーテのような人を考えればよい。世界のうちなるどのような事柄に対しても適確な知識と判断をもち、およそ偏らず、まさにオール・ラウンドな人は、18世紀で跡を絶ったといえる。19世紀は、それまで哲学の中に属していた諸科学が哲学から出て、一つは一つと分立していった専門化の時代であって、そこに大専門家が続出し、それぞれの分野で著しい仕事をした。ファラデーやヘルムホルツ、さらには鷗外の師事したペッテンコオフェルなど、みな専門家の典型である。それらの人々は集中的教養を体現した人々であったが、その人生観、世界観はまことに謙虚で、敬虔ともいえるものがあつた。しかし20世紀になると、専門分化は一層その度をまし、世界についての全体的理解、すなわち教養の喪失はおおうべくもない。そして真の学問は教養を土台としてはじめて成り立つとすれば、ただ狭隘な一小事にだけ通曉しているにすぎぬ技術屋は、じつは *a learned ignoramus* という奇怪な存在にすぎないのである。連関して一全体をなし、全体の一部として成り立つべき学問の諸分野が、たがいに隔絶してその間に何の交通も伝達も対話も不可能となった今日ほど、学問の精神と離れた時代はない。アトム化はここにもその際立った一表現を見出しているのである。(すでに19世紀の終りにカール・ヒルテ

イが、この教養の喪失、主の言葉をきくことの饑饉、専門家の野蛮を心から憂い、いつわりの教養の特徴を指摘して、真の教養とは何かということを、明確にかつ励ましをこめて示してくれている。『幸福論Ⅱ』の「教養とは何か」)

断片性 Fragmentalitätこそ今日の世界の構造の特徴である。ピカートのいう Zusammenhangslosigkeit, Diskontinuität, Augenblicklichkeit, Atomisierungも同じ事態を示す言葉である。まさにボンヘッファーのいうように、今日われわれの仕事は断片でしかありえない。最も大いなる断絶を連繋せるその紐帯から離れ去ったわれわれには全き統一連関は望むべくもない。ヘーゲルの死とともに哲学の体系が消滅し去ってすでに久しい今、哲学といわず、物理学でも、生物学でも、数学でも、精神病学でも、その根本的世界像が確立し統一しているものはないといわれる。

専門化が極度に進むとともに現われたこの原理における分裂は、まさしく異常増殖である。断片が断片をよび、断片の集積がいつわりの体系の衣をまとっているのである。人文学とても例外ではない。自然科学の全体といわず医学だけをとっても、毎年発表される論文は無慮幾十万といわれるが、そのほとんどが単に瞬間の状況を捉えたまでの Feststellung にすぎぬ、つまり断片であって真理でないとするれば(Picard, Hitler in uns selbst. „Zerstörung der Wahrheit“), 年々専門的研究として印刷に付されるものの総数はどれほどであろう、これが分裂的増殖(癌細胞のそれに比すべき)でなくて何であろう。とすれば、もはや全きもの、完全なもの、統一せるもの、持続と連関を有するものへの努力は、一切徒勞なのであろうか。否、断じて否。ボンヘッファーもそうは考えないのである。

彼は断片を二つに分けて言う。「つまるところ、塵芥の山にすてられるほかはない断片もあり(そういう断片にとっては、それ相当の『袋』でさえなお勿体なすぎ), また、その完成はただ神のみよくなしたまうことであるがゆえに、数世紀にわたって意義を失わぬような断片、したがって断片でなければならない断片もあるのである。」(Widerstand und Ergebung. S. 153f.)断片的な生をしか営めないとしても、それは一概に歎くべきことではない。瞬間にして生れ、束の間に消えゆく断片をしかわれわれは生み出すことができぬとしても、それは必ずしも恨むべきことではない。われわれの努力が果て、力が尽きた後に、残るべきものは残り、消え行くべきものは消え行き、時をへてその全き姿が完成されるのである。断片も全能の御手の中にあっては、その壮大な聖曲の一音として用いられることができるのである。ボンヘッファーの遺稿それ自体がこのことを何よりも鮮

かに証示する。彼はヒットラーの滅亡をかたく信じていたが、投獄されたことにより、自分の主著たるべき『倫理』が未完成におわらざるをえなくなったことを心残りとしていたから、その断章が戦火の中を保存され、彼自らが完成することができぬときは、適当な人に編まれることを、どれほど願ったことかしれぬ。しかし、あの徹底的破壊をこうむったベルリンでのことであり、あれだけ多くの青年の命が失われた戦である。弟子であり心友であるベートゲに託した原稿が無事残るかどうかはまったく予測もつかず、そのベートゲ自身が軍籍にある以上、いつ命を失うかもはかり難かった。ましてや両者がつつがなく残り、ベートゲの手に編まれ、加えて自分の書簡も上梓され、全集まで出ようとは、まったく企図して叶わぬはもちろん、思いもよらぬことであったという外はない。摂理がここに働いたという以外にどういえるであろうか。

そして断片たる物と断片たる人間とだけが対峙しているこのアトム化の世界を逃れることなく、しかも断片を断片としてでなく全きものとして遇することにより、断片からも全きものが生まれるとピカートがいうように、われわれは、敢えて企てず、むりに凶らず、しかも絶望せず、自分が為しうることをなすの勇氣と力が与えられるよう祈らねばならぬ。そして、ボンヘッファーが言いかつ行ったように、Es をして Du たらしめるよう生きねばならぬ。この分裂の世にも、この裂片からも、全き業が起されることを確信して。

四

人間が人間たる所以であるところの内的持続、記憶、時間を失わせ、言葉をその最も根本において破壊し、学問教養を喪失せしめて、断片性、瞬間性、無連関の世界を現出せしめたこのおそるべき解体力は、ではいったいどこから発したのであろうか。そのたち現れた当の文明だけでなく、それがもたらされたおよそあらゆる文明から一切の伝統を奪って、その混沌の渦中に捲きこんでいるこの解体のとほうもないエネルギーは、何に由来するのであろうか。ピカートはつとにこれを「神よりの逃走」として把握したが、ボンヘッファーはそれをどのように見ているであろうか。

『倫理』(第6版)第3章の「遺産と没落」(Erbe und Verfall)という一文は、後でふれる彼の成人性という思想を知る上からも重要であるが、それはまた上の問いに対する彼の明確な答えを含んでいる。

「西洋は、イエス・キリストの形をとおして生み出されたその統一を喪失するとともに、虚無の前に立たされている。解き放たれた諸力が相合して、狂暴の限

りをつくしている。既存する一切のものは、絶滅虚無の脅威をうけている。ここにおいて問題となっているのは、他の数々の危機のなかの一つの危機ではなくて、終末の時における決定的な対決 (Auseinandersetzung der letzten Zeit) なのである……。西洋がおちいりつつあるこの虚無は、民族のかって栄えた歴史の自然的な終止、死滅、没落ではなく、それはふたたび、すぐれて西洋的な虚無である、すなわちそれは、反逆的暴力的な、また神に齒向かい、人間に敵対する虚無である。それは、既存する一切のものからの背反として、神に背く一切の力のこの上なき開展である。それは神としての虚無 (das Nichts als Gott) である。その目標、その限界を知る人は誰一人ない、その支配は絶対である。それは創造主にもまごう虚無であって、既存する一切のものにその背神の息吹をふきかけ、一見それに新たな生命を呼びさますかに見えながら、同時にその固有の本質を搾り取り、ついに一切のものは死せる骸^{アケ}となって崩壊し、投げすてられるのである。生命、歴史、家族、民族、言語、信仰——とあげてゆけばとどまるところをしらない、虚無は何ものをも容赦しないからである——それらはみな虚無への生贄となるのである。』(S. 112f.)

西洋の偉大なる精神的遺産はキリストとの出会いをまって始めて成立したが、近代においてこのキリストによる統一が信仰においても政治においても破られた。ルーテルの二つの王国についての誤解から生れた、この世界と自然的存在 (政治・経済・文化・理性) の解放と聖化は、人間解放をなしとげつつも、合理化の果てに機械化された世界を現出してきた、とボンヘッファーは考える。そして一層反キリスト教的な解放はフランス革命によってなしとげられたとみる。すなわち偏見を打破し、真実を尊び明晰を重んじる知的誠実の態度、つまり合理主義は、科学の技術化とともに人間への奉仕というより、むしろ自然の暴圧的制服という悪魔性をおび、つぎに天賦人權、四民平等、人類同胞をとさえ、一切の圧制を排し特権を否定しようとする運動は、その解放の末に大衆を生み出したのであり、さらに民衆の手中に歴史を動かす手綱はにぎられているという下からの考え方は、ついに民族主義を世界に拡めるに至ったのである。そしてこれら解放の諸力 (理性・技術・大衆・民族) は人間を奴隷化し、解放と自由への要求はかえって人間の自己破壊、すなわち虚無 (アトム化) へと導くにいたったというのである。

最大の統一、およそ結合和解しえぬものを結びつけ宥和せしめたその統一結合の源たる、キリストからの、神からの離反こそ、このおそるべき虚無が出現した所以であるというのである。そして、この一切を押しひしぎ、押し砕く虚無の鞞

の前には、歴史的伝統はことごとく壊滅の外ないのである。結合の極大たる神の愛に背いたところに生れたこの分裂、分離、破碎、解体、壊滅の力は、神の愛が大なる結合であるだけ、ほとんどそれだけ大きな破壊力とならざるをえないのである。現在世界を席卷するアトム化が中国からもインドからも生じえなかったこと、科学も技術も大衆社会も民族主義も、そしてアトム化も、一たんキリストを受け入れたのちそれに背いた西洋からのみ出ることができたことは、故なきことではなかったのである。

この虚無の深淵を前にしては、過去も未来も意味を失い、ただいまの瞬間があるだけとなる。持続的印象を与えるものは何一つない、一切は現れたかと思えばすぐに消え去る、いな消えるためにだけ現れるのである。世界史的大事件も稀代の犯罪もほとんどわれわれの記憶に跡を残さない。過去の伝統を失い、未来への希望を失った人間には、もはや内面の建設はなく、ただ動物的な肉的享楽と賭けごとのスリルがあるだけである。個人の尊厳も運命も意味を失う。待望することも虚無の人、アトム化せる人間には不可能であって、恋愛も仕事も躁急となり瞬間的となる。ましてや苦悩が人生に対してもつ建設的価値は知るべくもない、ボンヘッファーはこのように主張している。

「確固不動のものは何一つとしてないのであるからあらゆる形における信頼も、歴史的な生活の基礎も、砕け去る。真理への信頼は存在しないのであるから、真理に代って、詭弁的宣伝が出現する。正義への信頼が存在しないのであるから、有用なものが正しいものであると宣言される。そして、確固不動のものに基いている他人への暗黙の信頼すらも、お互を猜疑の眼で毎時毎時監視しあうさまにいたるのである。では何が残っているのかと問うならば、それに対する答えはただ一つ、すなわち虚無への不安 (die Angst vor dem Nichts) である。今日われわれがなしつつある最も驚くべき観察は、虚無に直面して人は一切のものを放棄するということである、すなわち自分自身の判断も、人間であるということも、隣人をも。」(S. 114.)

人間をその生を中心につなぎとめていた一切のものが、この虚無の前には力を失う。人命は軽んじられ、伝統も歴史も一擲され、家庭は崩壊し、社会はその連帯を断ち切られ、民族はその明確な形姿を失い、言葉は破壊され、信仰すらも覚醒した次の瞬間にたちまちにして奪い去られていくのである。およそ人間をして人間たらしめていた一切のものが、崩壊していくのである。そしてそれは、人間が神に背いたことから起ったのだとボンヘッファーは強調してやまない。彼のいうとおりこれはすぐれて西洋的な虚無であるが、しかもその影響の及ぶところは単

に西洋だけでなく、西洋と接触した全文明にいたり、それら一切の文明をその中核において破壊したのである。

ところで、われわれ日本人ほどこの西洋的虚無から縁遠い文明民族はない。その神観において今なお原始のままといつてよい日本人に、この虚無の深刻が十分な意味で理解されぬのも怪しむに足りない。しかし、その日本人ですらこの虚無の力を実物教育で知らされているのである。日本をして文明国としてくれていた中国文明、インド文明からの借物は、その道德宗教をも含めて、この虚無を前にしては全く一たまりもなく崩れてしまい、西洋的虚無の産物の拙い模倣と、一切の文飾をはぎとられた日本特有の心性とが、奇怪な絡まりをしている状態に、今日われわれはおかれているのである。その実例はいちいちあげれば限りがない。人格の観念がなく、したがって真に個人の尊厳をも知らぬ、日本人の生命軽視の風が、西洋技術文明の利器の濫用と相俟って、年に万余の生命を奪い去り、数十万の傷者をつくり出し、百万をこす肉身の人々を悲歎の底に陥れている交通戦争を現出していること（車1台あたりの死亡事故がアメリカの8倍だということは何を語るか）、日本人の真理と学問精神に対する無感覚が、西洋に始った大衆化の動きと一つになって、西洋諸国の数十倍もの大学（？）をこの狭隘な島国につくり上げたことだけををとってみても、このことは知られるのである。今日われわれの当面する一切の問題は、つきつめれば、西洋の虚無的破壊（ピカートのいうアトム化）、特殊日本的な民族的心性（つまり神道）、その両者が出会ったこと（トインビーのいうエンカウンター）、この三つの根本事実の認識に帰着するのである。このどれ一つを見逃しても現代日本の精神的課題は果されないのである。

ボンヘッファーは、虚無の権化ともいべきヒットラーとの対決にその生命をかけたが、その敵虚無の本質を、じつに鋭く適確に見据え見抜いていた。ボンヘッファーが「今や終末の時の決定的対決が問題である」というその事態は、今日なおその酷烈の度を増してわれわれにのぞんでいるのである。

五

おわりに、現代の精神的状況についてボンヘッファーの達しえた洞察の深さを示す「10年後」(Nach zehn Jahren) 中の一章について述べておきたい。それは「確固として立つ者は誰か」(Wer hält stand?) と題される文である。

善が善として称揚され、悪は悪として糾弾されて、それぞれが倫理的秩序に従う時代は過去となり、今や善悪混紛として、依るべき規準、踏むべき大地のないこの普遍的溶融の現代にあって、しかも悪に対決し確固として立つ者は誰か、ボ

ンヘッファーはこれを問うのである。

まず理性でもってこの悪に立向おうとする態度について言う、「いとよき意図をもちながら単純にも現実を誤解して、支離滅裂におちいった世界を、理性でもって再びつなぎ合わせることができると考える理性に頼る人たち (die Vernünftige) の失敗は今や明かである。彼らは、その不十分な視力であらゆる面を公正に取り扱おうとして、何一つ達成することもできないまま、相衝突する力によってすりつぶされる。」(Widerstand und Ergebung. S. 11.) 彼らはこの非合理の世界で何一つ効果あることをなしえぬまま、諦めるか、強者に屈服するのである。

近代における理性の自覚は、啓蒙時代にいたって理性信仰ともいうべきものになり、19世紀には科学にその活動の場を移して、自然はもちろん、人事も、一切が理性の法則に従うものであるとの信念を生むに至った。しかし、現代は全く様相の一変した世界なのである。科学技術を頼りにして人類の幸福と進歩を確保しようとか、いわゆる学校教育を通して真の人間を形成しようとか、合理的代議政体によって漸進的に悪を除去しようとか、大衆の自治力に信をおいて民主的に一切の課題の解決をはかろうとか、これらはいずれも善き目的のためではあろうが、この分裂の世界に対しては力をもたぬ。単に合理に立ち理性をのみ信じて事をなそうとする人は、現代の世界の状況を見抜く眼をもたぬ人である。民主主義がヒットラーの抬頭を防げなかったこと、一切の科学分野が総力戦下ヒットラーの目的達成にかり出されその従僕となったこと、教育がいかに誤った宣伝に利用されたかということ、知識人の理論的反抗が、いかに老獪なまたときには強引な手段をもって一蹴されてしまったかということ、痛切に体験したボンヘッファーにして、この批判は重味をもつのである。理性はこの悪には抗しえないのである。

つきには倫理的熱狂主義 (ethischer Fanatismus) が考えられる。「熱狂主義者は、原理の純粹さを以てすれば悪の力に対抗できると考える」(同頁) が悪の全体を見わたせず、闘牛が赤い布に突進していくように、相手を違えてつかかり、奔命に疲れて倒れてしまうのである。彼らは真理を愛し、正義のためを思い、高き価値に仕えようと決心してはいても、目的を達しえず、更に利口な者に服することとなるのである。

誠心、誠意、熱意、純真、一点の利欲私心を挟まぬ純粹なる原理原則、これこそ一切の苦難を克服しうると信じていても、悪は彼らを巧妙にあしらい、緩急適宜にその目標をそらせ、結局思いのままにしてしまうのである。冷静な合理主義者は、あらゆるものをあらゆる面から過不足なく公平周密に取り扱おうとして悪

そのものを見失ってしまい、熱狂主義者は悪の一面に執して、その多方面を見ることができず、ともに悪の軍門に降る結果となるのである。

そこで次に考えられるのは良心の人 (der Mann des Gewissens) である。「良心の人は、決断を迫る危機的状態の圧倒的な力から身を守ろうとして独り戦う。しかし彼は自分自身の良心によるほかには決して助言が与えられず、支持も受けなくて撰択せねばならないために、その葛藤があまりに大きすぎて、ずたずたに引裂かれてしまう。」(同頁) 悪は仮面をかぶり、上品な美々しい装いをこらし、魅惑的な化粧をして良心の人に近づくので、他に拠所をもたぬ彼は、たえず欺かれはせぬかと警戒しながら一人で決断を下さねばならぬ。自分の決断に誤りはないと思っても、やはり一抹の不安、不確実を払拭できない。そしてもし自分の良心もが欺かれやすく頼りないものであれば、彼はもはや存在理由を失うことになるので、それを恐れるのあまり、言い逃れをする良心 (salviertes Gewissen) をもつに甘んじる。自己の良心を守ろうとした挙句、遂にはその良心を偽るにいたるのである。「それというのも自分の良心だけに拠所をおこうとする人は、呵責する良心 (ein böses Gewissen) の方が自己を欺く良心よりも救いになりうるといことが、決して理解できないからである。」(S. 12.)

自己が汚れなく瑕なき者であることに良心の人は固執する。良心の人は罪を認めることをあくまでも拒む、自己が自己自身と分裂しないことをどこまでも求める。自己の行為はすべて自己の良心の指令のままに行われたものであること、また行われうるものであること (自律) をあくまでも主張する。良心は自己の法則で自己を縛って自己を片時も自由にさせない。不安動揺はここにその源をもつのである。そして今や自己と他、いな自己と神との結合統一が引きさかれ、それ故に分裂の強大な力が世界全体を寸断しているアトム化のさなかにあることを弁え知らぬ良心の人は、自己を自己自身と合一せしめようとして、遂に挫折するに終るのである。

そこで次には、良心の自律のまさに反対である、外的義務に従う人が考察の対象となる。良心に照していちいちの場合自ら決断を下しては、不確実で不安であるから、命令という確実なものに服従することが、唯一確実な道だと思えてくる。命令に対する責任はそれを下す者であって、それを実行する者にはないといのである。しかしこうなると、自己の責任において行為することはなくなり、悪との対決はおろか、遂には悪に屈服し、悪魔に対しても義務を果さねばならぬ破目となるのである。これは単なる屈服の道であり、善悪不問の道である。(アイヒマンはこの好例)

ついで考えられているのは自主自由の人である。自己最奥の自由 (die eigenste Freiheit) に立って、この世の中で自己の義務を果そうとする人、やむをえず避けられぬ行為を自己の良心の呼び声よりも高く評価する人、臨機に自由に効果ある方に進む人、時には原則を斥けて妥協をとり、時には中庸をすてて過激に出ても、効果をあらしめようとする人がそれである。しかし、このような人々は、その見かけの自由によって、遂には墮落破滅に導かれるのである。「彼は、悪の中に進んで身を投じて、それ以上の悪を防ごうとする。ところがその場合、避けるつもりなのにいまわしい悪そのものが、より良きものであったとしても、もはや彼はそれを認めることができないであろう。」(同頁)

ヒットラーには批判的な人々も、第一次大戦の敗北に伴う賠償とインフレの経験にこりて、敗戦だけは何とかさげたい、勝利のうちに戈をおさめたいと考えたとしても無理からぬことではある。抵抗派の人々も多くはそれを出たものではなかった。他方モルトケ伯のように、徹底的な敗戦によってしかドイツの犯した罪は拭えぬと信じていた少数の人々もありはした。ボンヘッファーも、1939年アメリカからの帰国を決意したときニーバーに宛てた手紙からも判るように、ドイツの敗戦によってキリスト教文明を救うか、ドイツの勝利によってそれを亡すかという恐るべき撰択の前にあつては、躊躇なく前者をえらぶ覚悟をしていた。何より大なる悪とみられる祖国の敗戦こそが、実はより善きもの、いな唯一の善きものであることを彼は洞察していたのである。この覚悟をもって祖国に踏留ることは容易なことではなかった。戦に疲れ傷めつけられた祖国の中にあつて、その祖国の敗戦を願うことは、どれ程辛いことであるか知れぬ。しかし彼はそこに聖旨の所在をみたのであつた。臨機に効果ある道を歩もうという自由の人にはこれではできぬことである。或は妥協に、或は過激行動にと自在に活躍する自由の底の底に、意識されぬ保身の欲求、安楽欲、名誉欲が蟠踞していないかどうか、そしてそれがこの自由を無効たらしめていないか、誰が知ろう。われわれは自己の自由な(実は勝手な)判断によって、悪に与してはならぬのである。それによって悪の善への転換ができるなどと思ひこんではならないのである。

こうして五つの道が悉く無力と判ったからは、もはや悪には抗しえぬと諦めて、ひたすら自己一身を潔く保ち、盗まず殺さず犯さず、自分の力の範囲内で善き業に励む外はないという諦念以外に残らぬと思えてくる。ボンヘッファーはこれを私的節操 (eine private Tugendhaftigkeit) の人と名づける。しかしこの人々は社会悪との対決から逃避する以上、自己の周囲の不正に対しては、目も耳も口も閉じねばならない。「自己欺瞞という代価を払うことによってのみ、彼は責

任ある行動のゆえに手を汚すことから免れて、わが身を清く保つことができるのである。彼がどんなことをしても、しないでおいたことが彼を落着かせないであろう。彼はこの不安のために破滅するか、それともパリサイ人の中でも最も偽善的なパリサイ人になるかであろう。」(S. 13.)

この悪の仮面舞踏会の世界、この分裂の世界にあって、世界の悪に直面し、それを直視し、それと対質することなしには、およそいかなる徳行も保つことはできないのである。ひそかに善行をなすうる安全地帯を許すような悪とは、悪の質が違うことを考えねばならぬ。公の行為をしない以上、個人的に節操は維持しているぞと気張ってみても、所詮それは自己欺瞞にすぎず、世界はこの節操氏をもその分裂の渦中に呑みこんでしまうのである。俺様は正しいぞ、世間は狂っているが少くともこの俺様は悪いことは何一つしていないぞ、という己を高しとする偽善が、この人士の心底深く根を下しているのである。

以上の六つの態度——理性主義、倫理的熱狂主義、良心、義務、自己最奥の自由、私的節操——この何れかに依っていない者があろうか。われわれ自身が、この何れか一つまたは二つ、いや（特に日本人の場合には）この六つの立場以下のものをたよりに日々を送っているとすれば、これらの態度を非難する資格はない。これらの立場に立って人間は今まで実に偉大なことを成し遂げてきたのだからである。また、世界の秩序、倫理的秩序の中での悪を相手としてならば、この何れかで対処できぬことはないのである。しかし、ボンヘッファーが直面し、また今われわれが直面している悪は、そのような悪ではない。それ故にこそ、これら六つの立場はことごとく無効に終わったのであった。では確固として立つ者は誰か、ボンヘッファーは誰をわれわれに示そうとするのか、このような人類の最良の立場をことごとく批判し去るのは、それこそ虚無ではないか。しかし、もし次のボンヘッファーの言葉がなければ確かにそうである。しかし彼はこう確言しているのである。

「確固として立つ者は誰か。それは、自分の理性、自分の原理、自分の良心、自分の自由、自分の徳を究極の規範としない人、神を信じ、ひたすら神のみに結びついて、従順な、責任ある行為をなすべく召しをうけるならば、これら一切のものを犠牲にする覚悟のある人、すなわち、その生活をひたすら神の問いと呼声に対する応答たらしめようとする責任ある人 (der Verantwortliche) だけである。」(同頁)

理性の人は自己の知で解決を見出そうとする。熱狂主義者は自己の行動原理の純粋に唯一の拠所を求める、良心の人は独り己が良心を守ろうとする、義務の人

は責任を放棄することによって自己を咎なき者たらしめようとする。自由の人は自己の臨機の判断と出所進退を最上策と信じる、私的節操の人は自己一個だけの徳を守るに汲々としている。自己の理性、自己の原理、自己の良心、自己の義務、自己の自由、自己の節操、ことごとく自己、自己、自己、自己である。この自己に定位して分裂の途方もない力、虚無の恐るべき破壊力に抗おうとすることは、できないことである。そこから離れることによって虚無が分裂が生起した、その根源に人間は今度こそ立ち帰らねばならぬ。その復帰の道はすでに神の愛によって備えられてあることを悟らねばならぬ。世界はこの中心への復帰、この根源との結びつきの恢復なしには、もはやその存続もできぬ時期に立ちいたっているのである。道はすでに整えられ、光はその道へわれわれを招きつつある。悪との対決はこうして、しかりこうしてこそ勝利に導かれうるのである。ボンヘッファーはこの道に従い、この道を歩み通した人なのである。

(つづく)